

小泉信三賞

競争社会を生きる〈つながらり〉を 構想する

佐藤 遼さとう りょう

(東京都／私立開成高等学校三年)

1. 空気、そして人間の物差しとしての競争

人に笑顔を向けつつ、文字なきテキストに目を凝らす。そして場の「空気」が少し不穏に震えれば、すぐに感じ取る。自分がしる無数の振る舞いの選択肢は、人から歓迎されるもの、無視されるものからとてつもなく嫌悪されるものまで無数に存在し、その中からマイナスにならないものを慎重に選び取っていく。声の高低、言葉尻のイントネーション、会話への参加の仕方など、そこで是認されうるものをなんとか直観し、その場に馴染む努力をすることが多かった。この「その場」という言葉は「空気」の状況依存性を象徴する。デイベートの部活と同じ会話の「ノリ」をクラススの友

だちと話す場所に持ち込むことはしなかったし、学年内で緩く出来ていたグループをある程度変転としてきた身としてはその場その場で喋りも振る舞いも少しずつ変えていた。

こうした状況は社会学者の土井隆義や精神医の斎藤環が分析している。現代の若者は、「他者の許しが必要ならば、自分を愛することすら難しい」(斎藤環2013)とし、以下のように〈診断〉する。自己の本質的な性格とは無関係なその場その場での役割としての「キャラ」を通して、その場に自分の場を獲得することに囚われている。そして、「キャラ」により単純化された円滑なコミュニケーションを促す力としての「コミユ力」を通して強力な序列が形成さ

れる。すなわち苛烈な「コミユ力」競争が行われていると。

この観察に対する「当事者」なる自分は最初、「半分正しく、半分違うかな」という感覚を抱いた。確かに、周りからの承認を意識して行動したことがないと言えば大嘘になるし、周りもその原理に基づいて動いている面も見られる。一方、飄々として「自分を持つている」人も多く見受けられる上、土井氏や斎藤氏の提示する(ように見える)、承認が自分の(全て)を決定づけているという強迫観念に四六時中支配され、目の下にクマをつくってSNSに張り付いているようなデイストピア観を具現化したような人は、むしろ中々見当たらないのではないかと感じる。

しかし、この分析は以下二点において示唆に富んでいる。第一に、「半分正しく、半分違う」は、社会分析の宿命ではないかということ。社会自体に関心を向けるとき、社会「全体」を捉えるという幻想を抱きがちだが、実際その観察は我々の解釈が介在せざるを得ない。その解釈は、ある要素を重要と見なし、他の要素をそう見なさない営みと、その諸要素をある意味体系にそって繋げる行為を含む。端的に、社会分析は

常に社会を捨象してある「面」を捉えざるを得ず、その点でキャラとコミュ力をめぐる「闘争」が行われているという分析は、若者を取り巻く社会の、高々一面かもしれないが、確かに存在する一面を掘り起こし問題化している。

第二に、「コミュ力」に留まらない問題意識が喚起される。ある競争による勝ち負けが、あたかもその人の全人格の価値を決定づけてしまう力学は、意外と社会に遍在しているのだ。学力や学歴がその一例だろう。私は塾のフリースペースで仲良く話していた人に自分の学校を明かしたら同い年にもかわらず敬語が使われたこともあるし、勉強が不得手な弟が競争主義的な父親に苦しみられる姿を間近で見てきた。また大人の世界に目を向ければ「現代の低成長時代における成長志向、そのための市場原理の拡張が競争を激化させ」（総合人間学会編北見2015:102）ており、能力主義や自己責任論の強調がなされてきたことも重大な異論はないだろう。

一方確かに「競争に勝つことが全てじゃない！」という平等主義を標榜した論理や実践も観察されるが、第一に競争主義という現代の趨勢に対するアンチテーゼに過ぎ

ず、加えて社会全体を覆い尽くすレベルには達していない。

すなわち現在の社会はこう観察できる。「競争」と「平等」が、それぞれ競争をしている。その闘争の中で、競争での勝ち組と負け組のふるい分けによる力学は、過去よりも不均一に、しかし問題化するには十分なほどある一定の人々に強力にかかっている。事実、社会学者の菅野仁は今日の日本社会を「現実においては過度の厳しい競争社会の性格をもつ反面、思想や理論という側面からは、競争や闘争を全面的に否定しようとする傾向がかなり見られる。いわば現実と理論が大きく乖離した状況が続いている」（菅野2003:186）と端的に喝破する。

考えてみれば、競争と承認は緊張関係にある。競争は勝者が敗者の取りたかった席を奪つて、——大げさに言えばその存在を否定して——カタルシスなり、地位なり、名声を得るといふ構図を持つ。「コミュ力」や「学歴」を筆頭として、全人格の価値を規定しうる威力を持つ競争に否応なしに組み込まれる我々は、「負けたら終わり」なのか？ 本稿の問題意識はそこに端緒を持つ。

そしてこうした状況への本稿の視座は、競争の構造自体に働きかけることでも、ましてや社会での競争の全廃でもない。こうした社会に対する（フェアな）向き合い方とはなにか、そして人々をその向き合い方に自然に水路付けられる人同士の繋がりの在り方とはなにかを問う。そして、その繋がりの中身に、相互補完的な二つの条件が見いだせると結論する。一つは、分化した自己を引き受ける「居場所」の確保、そして二つ目が、〈愛〉的な〈関係性〉である。

2. 結局、人は認められない

「人は社会的動物である。」という常套句は、自我という基礎的な単位のみに着目する時も妥当する。自己認識は他者からの眼差しで満たされているからだ。その眼差しの支配性の強さはさておき、他者からの視線を自分の中に取り込むことを通して再帰的に自己認識が形成される過程を論じた学者は多い。「鏡」たる他者からの認識や評価を想像することによって自己感情が成立すると論じたC・H・クーリー、他者からの期待をそのまま受け取る「客我」（me）と、その客我を見つめる「自我」（I）の不断の影響関係を通した動的な形成過程に

自我の本質を見出したG・H・ミードなどが大家といえる。つまり、自我という真に原理的な視点からも「人はひとりでは生きていけない」のだ。生命維持に必要な資源が得られないであるとか、それ以前の話として。

自己認識は他者からの眼差しから自由になれないとすれば、承認を人が存在するための根本的なものとして位置づけることも必然に思える。しかし、もっと身近で経験的な面から承認と人の生き方の関わりに迫ることにしよう。

前章にて自分が抱いた「そんなに承認って(全て)かな？」という違和感はあるが、ち誤りではなからう。例えばスマホゲームをするといった利那的な快楽を求めながら生きることも原理的には可能で、人の生の存続理由をそうした利那的な快楽の連続に見出すとき、承認はゲームと同列な快楽の一形態にすぎず、承認がなくとも他の形態の快楽を追求すれば良いという主張がある。しかし、承認が全く要らないなんてことはなく、絶対的な承認の欠落の感覚は生をも脅かすことを我々は知っている(いじめによる自殺の問題など)。加えて、承認されている実感が持てず、鬱屈とした気持ち

であれば、そうした利那的な快楽を求めようという気が削がれるし、上手く快楽を享受できないことがある。その意味で承認は基底的な役割を果たすといえる。

以上、自己認識に即した原理的な視点と実際の生活感覚に引きつけた経験的視点から承認の立ち位置を見てきた。最後に承認が重要な価値を帯びるようになった社会背景、価値観の多元化について取り上げる。

土井氏は「私たちは旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない自由で多様な価値観を持つように」(土井 2014: 9) となったとした上で、NHK放送文化研究所の「日本人の意識調査」の結果を統計的に解析し、一九七〇年代頃から「伝統志向」から「伝統離脱」へとシフト(同上) していると指摘した。社会から絶対的な物差しが失われ、世の中に様々な価値観が氾濫するようになった結果、自分の生きる道の正しさを確信しづらくなり、身近な他者に認めてもらうことを通して安心感を得ようとする傾向が強まったという分析は一定の説得力がある。

3. 分化された居場所の重なりの中で

改めて競争主義の巣食う現代社会を観察

しよう。勝者の論理では「負ける者がいるからこそ、勝つ者が光り輝く。(…) 人間社会が生き残るためには、勝者が生き残るという競争システムを採用し続けることが不可欠」(岩崎 2015: 6) だと主張される。こうした、競争をするかしないかという二項対立が前提された議論は、しばしば重要な視点を見落とす。まず実態として競争はこの社会で多元的に展開されるということ。そして、にもかかわらず単一の競争とそれによる序列化への服従を強いられる場合があることを問題化すべきということだ。例えば勉強が不得手な弟が将棋に才能を持っていて、もしかするとそこで競争するのが一番「輝ける」のに、勉強ができないことで人間として劣等な「感じ」を抱いてしまうといった状態がまずいのだ。

社会学者A・ギデンズは、『親密性の変容』において、人間関係は階級を筆頭とするソリッドな制度的制約から解放され、より自由で選択的なものになったと主張したが、昨今のインターネットの普及により、その動きに拍車がかかったように感じる。人々の関係の自由度や流動性が増えます高まり、それに伴って社会はより多元的で重層的な集団や繋がりによって構成されるよう

になった。同じ趣味や関心をもった人が地理的制約を越えて繋がれるようになり、多様な大きさ、結合の強さ、個人に課す役割を持つコミュニティが生まれては消えるという動的なカオスを現代の我々は生きているというのが私の実感だ。ゆえに、社会学者G・ジンメルは一八九〇年に著した『社会分化論』で、社会が機能分化を通して個人に多元的な役割や活動の場を与えた結果、人間自身も自己の何たるかを分化して提示するようになったと述べたが、この状況は今なお健在で、加速すらしている。

自己の分化に伴い、〈断片〉の総体なる人間はさらに多様な断片を含む存在となった。学校の生徒としての自分、スポーツ選手としての自分、デイベートの選手としての自分、兄としての自分などと、ある限定された場面においての役割と、それによって定義される性格や個性を面として持つ存在である。

人間を多様な面の総体として見たとき、問題としてしている一元的な競争による圧力の罪悪が見えてくる。ある一面にすぎないものが本人の望まない形でその重要度を肥大化させてしまうのは不当だ。しかし、その分化した自己の様々な側面の承認を個別に

引き受ける「居場所」を見つければ、それがこうした問題状況の回避策とならないだろうか。

社会に共通の関心を基盤とした多様なコミュニティが存在する以上、「居場所」をこれらに見出すという発想は自然だろう。コミュニティへの所属感は、承認されている感覚の源泉といえる。こうすれば、自分が今まで押し付けられていた競争の絶対性を揺るがし、自分が本当に参入したい競争に没頭するなり、競争から離れた何かで承認と自己充足感を得る生き方を選択するなり、前向きな対応ができるだろう。

また何より、複数の面についてそれぞれ居場所を得ることで、その複合体としての自分にアイデンティティを見出す可能性が生まれる。コミュニティへの所属感により承認を得た自らの面Aと同じく承認を得た面B、C、…とを(かつ)で結ぶことで、他の誰でもない自分が姿を現す。

社会学者の貴戸理恵は、働かない人の社会包摂という文脈であるが「一枚の名刺やIDカードが『その人が何者か』を明かすのではなく、複数の場や関係性を束ねる結節点として、自己の固有性が証明」(貴戸2018:183)とされるべきだと言う。自分は

就労支援の文脈を超え普遍的に目指されるべき(つながり)だと強く信じている。

4. 欠乏感を補うもの

こうした面ごとに認めてもらう人間関係の在り方は〈冷たさ〉を生み出す。ジンメルは分化した社会では「秘密」、すなわちある限定された場面で自己の一つの面を見せるとき、他の面を「見せない」し相手も「見ない」関係性が特徴であると言う。「人は完全に結婚しているのではなく、ただかたんに人格の一部で結婚しているにすぎない」(ジンメル2014(上):188)のだ。

そうした人間関係の究極形か、『朝日新聞』二〇一三年五月二日朝刊で一七歳の女子高校生はこう語る。「友だちを使い分けています。一緒に勉強する友だち、将来の話をする友だち、校外活動をともしにする友だち。局面に応じて最適な友だちを選んでいる。」(土井2014:86)

ある人はこう問うだろう。「それって『本質的な』人付き合いな?」。そして、分化した先々に根を下ろし、一応の居場所を手に入れた(私)は、その場その場では受容される感覚を得ながらも、例えば一人になつたとき深い悩みに突き当たったかもしれ

ない。「私『自身』」を見てくれる人はいないの？」と。件の女子高校生の人付き合いの在り方に〈ドライさ〉が感じられるのも、その人の特定の面しか見ず、いわば人としての〈豊かさ〉たる多面的な部分でないのと見なししている。ここが人間的でないのだ。人の内なる宇宙を——葛藤し合い絶えず変化をする、本人ですら全てを捉えきれない深淵を——厭に、ほんとうに厭に平気で見ないでいる点に〈ドライさ〉、人間味のなさがある。この欠乏感からいかに救われることができるのか、問題の焦点はここに移る。

こうしたドライな人間関係に對置される他者の受け止め方は、無条件にその人を特別な存在と認め、肯定する受け止め方だと考えられ、これを〈愛〉と呼びたい。無条件に、というのは強烈だ。優しい、あなたが好き、面白い、あなたが好き、ではなく、「あなたがこの世に存在している、それだけでいい」のだ。あなたが喋れなくなくても、余命が三ヶ月でも、犯罪を犯してしまっても、あなたが他でもないあなたとして存在するだけで特別な存在だと言えることだ。端的に、本質でなく実存の肯定が本稿での〈愛〉である。

しかし、〈愛〉が受けられる人間は特権的なのだ。この形での承認は家族や保護者が容易に想起されるが、令和二年発行の内閣府『子ども・若者白書』での満一三〜二九歳を対象にした令和元年度の調査では、「自分の親（保護者）から愛されていると思う」と答えた人は七三・七％であり、少なくとも四人に一人は親からの愛を感じられていない。仮に幼少期に家族から〈愛〉を得ても、親との死別で備えるべく血の通わない他者との繋がりによって求めても途方もない茨の道が待っている。恋人関係では金目当て顔目当てにキープ（自分の「本命」に見捨てられた保険として関係を持つ相手）といった断片化された承認に、そうした不完全な承認しか得られていないんじゃないかという疑念。その疑念と本当は〈愛〉を受けたいという思いの複雑な葛藤が相手と自分で上手く交わらず生じる軋轢。そして仮に結婚に至っても三組に一组が離婚する現実の中、何十年も理想的な関係を維持するのは想像以上に難だ。

つまり断片化された人間関係からくる欠乏感を〈愛〉が満たしてくれるという期待は、往々にして空疎に終わる。では、この現実を甘受してドライな人間関係を生き抜

くしか手はないのか、と考えるとき、ある直感が頭をよぎった。自分はそのようなドライな人間関係のみに囲まれて生きてるのではないのではないかと。実存の承認という大それたことと、ある人をその人の特定の面でしか捉えない承認との中間に、まだ個人化された関係としての温もりが感じられる関係性があるように感じられた。例えば、気の置けない三〇年来の友人といった関係性は多く見られるし、少なからぬ人が限定された場面を超えてある人と親しくなり、より関係が個人化される感覚を抱いたことがあるだろう。この中間態としての〈愛的な関係性〉を分析し、その役割を考察する。

5. 〈愛的な関係性〉の分析

端的に〈愛的な関係性〉を記述すれば、以下のようになる。無数の断片の総体なる相手のある一定の面に対しては肯定的な評価ないし感情を抱く。他の一部の面については中立的ないし否定的な評価や感情を持っていても、「寛容」さを持って受け入れる。見えていない面とまだ見ぬ面に対しては潜在的な「寛容」さを持つ。まず、特定の面に対して肯定的な評価及び感情を

抱くのは、親しく個人同士が関わるにあたっては必要条件だと考えられる。何かしら惹かれる面がなければ親しさは成立しない。

特定の面を承認することは前章で欠乏感を伴い得ると述べた断片化された人間関係でも同じことである。関係が個人化され、愛³的⁴なものに向かうには、肯定する面以外に対する態度が決定的な役割を果たす。愛的な関係では、肯定的評価・感情を抱いている面以外で見えている面は、中立か否定的な評価と感情を抱いているはずだが、最終的な態度としては「寛容」さをもつて受け入れる。それらの面を努めて見ないようにすれば断片的な人間関係の域を出ないし、否定的な感情が極端まで振れて関係性を破壊してしまえばそれで終わりだ。したがって「相手は間違っている、と思うのではあるけれども、それを寛い心で受け入れる、大目に見る、という姿勢」(藤野 2016: 100)を持つ必要がある。

そして、人が無数の断片によって構成されている以上、その全てを認知し尽くすことは不可能である。加えて、自分が今認知している断片も変容する可能性がある。そうした部分に対して潜在的寛容さを持つ必

要がある。つまり、「今後あなたが変わった、嫌だなと思う部分を見つけたとしても、それを受け入れます。」という一種の覚悟を持つ必要がある。最も、それほど親密になれば覚悟という言葉が似つかわしくないほど心理的負荷は下がるだろうが、それでもある種の賭けであることに変わりない。

これは、相手と関係性を作る因子となった断片以外の部分にもなんらかの態度を表明している点で、前章のドライな関係と異なる。一方(愛)と異なることにも注意されたい。愛は実存の肯定だと述べたが、例えるならば人という容器自体を肯定することである一方、愛的関係は容器の自身に対して具体的な態度を表明しており、その態度により関係性が規定されている。愛的関係は、愛の機能を代替するとまで断言できるかは留保がつくにせよ、「私『自身』を見て」という要求に込えているため、誰かしらとこの関係を持れば欠乏感を埋め、断片化された人間関係からのアジールとして機能し得るだろう。

6. おわりに

以上から、分化した自己を受け止める複数の居場所を通してその「結節点」として

の自分を見出しつつ、ある一定の人と個人化された愛的以上の関係を持つことは、一元化された競争の圧力から距離を取るために重要な生き方であるというのが本稿の結論だ。ここで、意外と多くの人がそれを実践できているぞという指摘があるかもしれない。確かに自分なりの幸せを見つけつつなく暮らしている人が多数いるようにも感じる。しかし過度に単純化された競争主義の喧伝は、それを信じる人なしにここまで聞かえてこないはずだ。自分の周りに潜む「暗黙の了解」は知らずのうちに形成されるし、空気のようなもので存在に自覚的になる機会が得づらい。そうした状況で今なお押し付けられた物差しに苦しむ人たちがいる限り、あるべき社会を構想する意義はなくなるまいだろう。

〈参考文献〉

アクセル・ホネット著(山本啓・直江清隆 訳)『承認をめぐる闘争(増補版)——社会的コンフリクトの道德文法』、法政大学出版局、二〇一四年(原著…一九九二年)

阿部彰『弱者の居場所がない社会——貧困、格差と社会的包摂』、講談社現代新書、

二〇一一年

井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』、有斐閣、二〇〇五年

岩崎夏海『競争考——人はなぜ競争するのか』、心交社、二〇一五年

菅野仁『ジンメル・つながりの哲学』、日本放送出版協会、二〇〇三年

貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』、青土社、二〇一八年

ゲオルク・ジンメル著（居安正訳）『社会学〔上〕』、白水社、一九九四年（原著：一八九〇年）

斎藤環『承認をめぐる病』、日本評論社、二〇一三年

総合人間学会編『「居場所」の喪失、これからの「居場所」——成長・競争社会とその先へ』、学文社、二〇一五年

デイヴィッド・リースマン著（加藤秀俊訳）『孤独な群衆（上）』、みすず書房、二〇一三年（原著：一九五〇年）

土井隆義『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』、岩波ブックレット、二〇〇九年

土井隆義『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』、岩波ブックレット、二〇一四年

内閣府「特集 子供・若者の意識と求める支援について」、『令和二年版 子供・若者白書』、二〇二〇年 <https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r2honpen/pdf/b1_00toku_01.pdf>

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学「新版」』、有斐閣、二〇一九年

樋口善郎「承認と他者志向」、京都市文学部哲学研究室紀要、二〇〇四年、<<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/24226/1/higuchi.pdf>>

藤野寛『承認の哲学——他者に認められるとはどういうことか』、青土社、二〇一六年

〇一六年